

氏 名	ソーマイ 曾 憲 明
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 140 号
学位授与の日付	平 成 14 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	経 済 学 研 究 科 経 済 動 態 分 析 専 攻
学 位 論 文 題 目	銭 荘 から 銀 行 へ ——上海における近代銀行業の形成と発展——

論文調査委員	(主 査) 教 授 今 久 保 幸 生	教 授 堀 和 生	助教授 黒 澤 隆 文
--------	------------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

大戦間期に中国最大の金融センターとなった上海金融業の分析は、近代中国金融業の形成と発展とを把握する上での鍵をなす。本論文は、その近代上海金融業の発展過程に着目しつつ、そこにおいて重要な役割を演じた2種の金融機関、すなわち伝統的金融機関である「銭荘」と近代的な中国系商業銀行とを主たる分析対象とし、また当時の外国銀行をも視野におさめながら、1860年前後から1930年代までの期間における上海金融業の構造的かつ動態的特質を検討したものである。未公刊・公刊の一次史料の精査と、既存研究の詳細な検討に立脚する経済史的・経営史的分析手法が採られており、次の各章から構成される。

「研究史の整理と課題」と題された序章においては、既存の中国研究史において金融業一般あるいは中国系銀行に与えられてきた評価、とりわけ中国の近代化過程への貢献に関する見方が批判的に整理され分析される。そのうえで、中国社会の伝統的な経済的諸制度が、近代的諸制度の移植の際にも重要な前提となったのではないかと、そしてそれが、とりわけ銭荘と中国系銀行の間の機能的・相互補完的分業関係と、両者の継承関係とに現れているのではないかと、との仮説が提示される。

第1章では、序章の視点を踏まえて、中国系商業銀行成立以前における銭荘業の全体像が、次の4期に分けてなされる。①開港前後から1860年までの上海銭荘業の形成期、②1860年代の外国銀行の進出期、③1870年代から1895年頃までの、銭荘と外国銀行の補完関係の確立期、④清朝末期の混乱の時期。具体的には、同業者組織である「銭業公会」の市場秩序形成機能や、「票荘」と銭荘との関係、貿易決済の中で銭荘と銭荘が発行する決済手段である「荘票」が果たした機能などが明らかにされ、銭荘が、近代的銀行業形成の社会的・歴史的基盤としての機能を有していたことが論証される。

続く第2章では、1890年代までを対象に、外国銀行買弁の役割とその歴史的意義が、買弁業務の遂行組織である「買弁間」の業務の検討を通じて分析される。それによれば、買弁は一面では独立の事業者として外国銀行・外国商社からの業務委託を受けつつ、①銀元・紙幣の授受、②手形決済、③短期融資の供与、④流動性の季節変動に即した銭荘からの借入業務、等の活動に従事していたが、他面では外国銀行・外国商社の内部に組織を持ち、これと一種の雇用関係を持つ存在でもあった。そして、新旧の金融市場間での情報流通が障害を抱えていた中で、地元取引業者の信用力を熟知していた買弁は、荘票・手形・貿易決済代金・短期信用の上海金融界での流れとこれに関わる情報の流れとの把握を手掛かりに、両者を媒介する機能を果たしていた。

第3章では、上海の有力銭荘の一つである「福康銭荘」、および「上海中国銀行」の事例が1910年代について分析される。福康銭荘の事例では、銭荘が単なる商業金融の担い手としての存在から脱し、銀行が獲得した預金の運用主体となっていたこと、新興の近代的商工業部門に対しても貸し手となっていたこと、また中国系銀行の銀行券発券業務の代行さえ行っていたことが示される。これにより、上海金融業の柱が、外国銀行と銭荘の二者間関係から、中国系銀行を交えた三者間関係に、更には中国系銀行と銭荘の二者からなる体制へと移行したことが示される。

第4章、第5章では、上海の文書館に所蔵される未公刊史料を駆使して、中国系銀行が重要な存在となりつつあった1920

年代から1930年代を対象に、出時中国最大の商業銀行であった「上海商業儲蓄銀行」に関する実証的な事例分析が行われる。

まず第4章では、1920年から1931年までの時期の上海商業儲蓄銀行の特質が、資本構成と経営組織、経営理念と支店戦略、上海での預金・貸付業、証券投資業務の内容などに即して詳細に検討される。その結果、同行の公債業務依存度は非常に低く、むしろ商業・産業金融や貿易金融、更に不動産金融などを中核業務としていたこと、融資手法の点では、近代的銀行業の貸付方法を基本的に用しつつも、さまざまな点で、伝統的商業銀行たる錢莊の手法を継承していたことが明らかにされる。

第5章では、上海商業儲蓄銀行の1930年代の対綿業融資活動に的を絞り、主として上海の近代的工業の二つの柱である製粉業と綿工業との、同銀行の緊密な関係が分析される。そして、とりわけ同銀行の、綿紡績企業「大生」と、中国系資本では最大の綿紡績業・製粉業兼営企業集団である「申新」グループに対する多様な形態による融資の分析により、同銀行が、商業金融の範囲を越えて、中長期投資の性格を持つ資金供与を、上海の経済発展を担う主要な近代的工業部門に対して行っていたこと、このことや、同銀行と他の中国系銀行による上海工業企業への共同融資などは、その後の投資銀行の出現や資本市場の形成を準備するものであったこと、が示される。

結語では、錢莊を代表とする伝統的金融業が、近代的金融制度の成立を阻害したのではなく、またその成立によって淘汰されたのでもなく、むしろそれ自体、近代的銀行業への発展の可能性を濃厚に持つ存在であったことが指摘される。中国系商業銀行については、自国の伝統的商業社会の特質を踏まえつつ、外国銀行と錢莊という対照的な新旧二種の金融機関の要素を融合させる点に、その経営基盤が存在したとの認識が示される。

論文審査の結果の要旨

まず本論文の高く評価されるべき点は以下の通りである。

第一に、本論文は、現代中国経済における上海の基軸的地位に対する今日的関心に基づき、イデオロギー的立場に規定されて対象に対する評価を二転三転させてきた研究史を批判的に整理しつつ、近代上海金融業の発展を、当時における経済発展を背景とした金融業の構造と動態に位置づけて、実証的に解明しようとする観点を提示している。その問題設定の正当性がまずは評価されてよいであろう。これによって、中国近現代経済史の一面に関する、学問的認識の可能性に道が開かれたと判断されるからである。

第二は、著者が、そうした観点による課題の検討を、『上海錢莊史料』を初めとする公刊史料とともに、何よりも2000年に史上初めて公開された「上海商業儲蓄銀行档案」の膨大な非公刊史料を駆使して実証的に行っていることである。ことに、著者が同史料の分析と解釈を集中的に行った第4章、第5章は本論文の白眉であって、この章の完成により、上海を中心とした中国近代金融史・銀行史・産業史上の貴重な事実発見が幾多ももたらされることとなった。

第三は、本論文が、伝統的金融機関である錢莊や票莊、外国銀行、そして中国系銀行という三者からなる金融業の構造を、それらの間の補完関係・継承関係・競合関係・並行的展開の諸相において捉えた上で、そこにおける外国銀行の一定の役割を評価しつつも、上海銀行業の重層的発展とともに、とりわけ錢莊から中国系銀行へという上海銀行業発展の基本線を、錢莊と中国系銀行との補完関係とそれに基づく継承関係に即して析出したことである。それは、同時に、近代上海金融業の発展が、通説にいうような移植一辺倒ではなく「自前の」銀行業の形成として実現したこと、伝統的金融機関である錢莊が、近代において独自の積極的意義をもっていたことをそれぞれ明らかにしたものである。

なお、今日の欧米金融史研究は、従来の紋切り型の各国銀行業史把握を見直しつつ、それぞれの国において多様かつ重層的な金融機関・信用制度の並行的・相互連関の発展が見られたことを明らかにしつつある。ここからすれば、本論文は、錢莊が、中国共産党政府によって廃される戦後の1950年代に至るまで中国系銀行と並行して発展し続けた事実を指摘していることなどからして、中国においても欧米の金融業史と比較可能な展開が見られたことを示すものとなっている。このことは、今日の比較金融史研究に対して有力な素材を提供するものであって、その意味でも学界に裨益するところが大きい。

第四に、中国系銀行の代表事例である上海商業儲蓄銀行を取り上げた第4章、第5章は、同銀行が、錢莊から人材や顧客や経営方式（商業信用など）を引き継ぐことで外国銀行と競合しない固有の経営基盤を獲得した点や、一部には輸入荷為替業務を実施して外国銀行の牛耳る外国為替部門に参入した点を解明するとともに、通説、すなわち中国系銀行がその資金を政府貸付や地産投資に振り向け、産業発展を殆ど幫助せず却って産業発展を阻害する作用を及ぼしたとの把握とは異なり、

商工業金融を、それもとりわけ近代工業企業に対する中長期の産業金融を極めて積極的に行っていた事実をも明らかにした。このことは、イギリス金融業の影響下にあったと見られていた大戦間期の上海において、中国系銀行が、イギリス型の商業金融業務というよりむしろ創設時点から産業金融・投資を手がけ、その発展に伴います産業金融・投資の比重を高めていった特徴的な事実についての新たな発見をなすとともに、同銀行が、事実上、綿紡績企業「大生」のメインバンクとしての役割を担っていたことをはじめとした銀行と産業との高度の結合関係が、この時期の中国経済発展においても形成されていた事実を実証するものであり、これらはともに極めて興味深い貢献をなすといえよう。

とはいえ、本論文の問題点も指摘されねばならない。

第一に、主として既存史料を用いた銭荘、票荘の分析において、著者が自らの課題設定によるこれの再解釈を試みる上で力点をおく、中国系銀行との連続性の中身の詰めになお甘さが残る。

第二に、著者が銭荘等と中国系銀行との関係を、基本的に補完関係および継承関係において捉えている点は、新たな史実の解明という積極的意味をもつとしても、上海銀行業の全体的な構造や動態を捉える視点にたてば、なお一面的であると言わざるをえない。具体的には、銭荘と中国系銀行の業務には、競合する部分があることからして、双方の競合関係とそれによる上海銀行業の体質強化の側面があった可能性、および、中国系銀行が、基本的には中小規模の銭荘等と対比しての、大規模工業信用需要に対応しうるほどの規模を持ち、また産業への中長期信用を手がけていった点からくる銭荘との性格の違いとそこからくる銭荘との非連続性の問題、を指摘せざるをえないのである。著者は叙述としてはこれらに触れているので、これらの問題を意識していることは読みとれるが、これらの問題は、全体の構造と動態の理解に深く関わるゆえに、著者の枠組み上からも、論点として設定された上で然るべき検討が加えられるべきであった。

第三に、中国における研究史の整理は理解しうが、日本における中国経済史研究の到達水準の吟味が必ずしも十分ではなく、そのために、惜しくも、自説の積極面の位置づけが不徹底なままに止まっている。というのは、今日の日本においては、当時の中国系銀行が公債投機に終始していたのではなく、有力銀行においては貸付金の4～5割が民間商工業へ向けられており、銭荘に代わって商工業の主要な金融機関となりつつあったことが解明されているからである。著者はこのような研究史の到達点を踏まえつつ、自らの事実発見が、商工業金融一般への貸付ではなく、その内容把握に関わるものであり、ことに産業への中長期金融を経営の基軸に置く有力中国系銀行がこの時期にすでに台頭しつつあった事実を解明したものであることを強調した上で、改めてこの新たな知見の経済史的な意義を論じるべきであった。

第四に、第5章の論述はなお荒削りであり、興味ある史料が提示されているが、それらが十分に消化されているとはいえない。また利用可能な財務史料による経営分析を行うことにより、上海商業儲蓄銀行の業務内容や産業企業との結びつきのあり方がより明瞭に解明されえたはずであるが、その点の分析まで徹底しきれていない点が惜しまれる。

以上、本論文のいくつかの問題点を指摘したが、以上は、一部は望蜀の類の指摘であり、また、その他も、著者が今後さらなる研究史の整理や史料分析を通じて解明しうるはずの、今後に残された課題ともいうべき点であって、上海金融業の歴史的な構造と動態をこれほどの新発見と射程によって解明したこの労作の研究史に残る貴重な貢献の価値をいささかも貶めるものではない。

よって、本書は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成14年6月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。